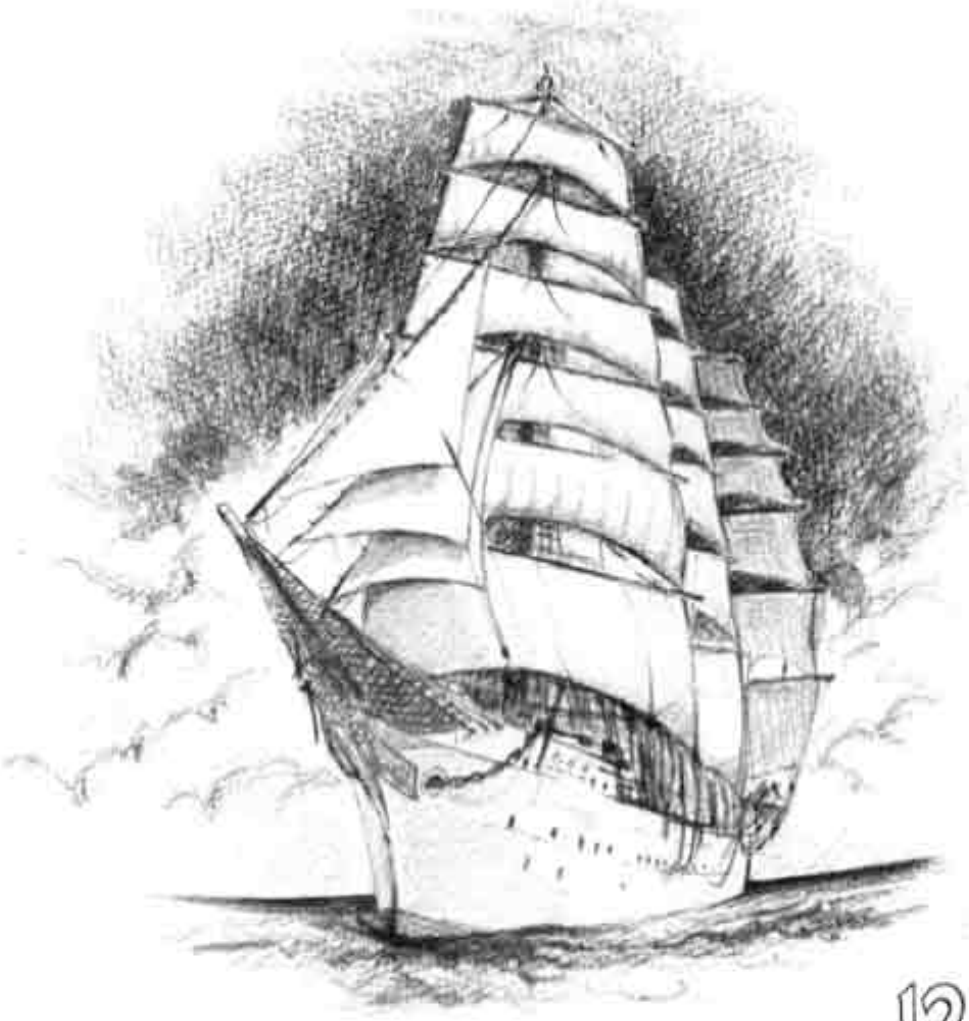
平成26年12月5日発行（毎月5日1回発行）
第56巻12月号（通巻660号）

風土



12

凛々と

南うみを

てのひらに包みて摘めり秋茄子

名月に捨田のすすき供ふべく

凛々とをののく雨のまんじゆさげ

里祭総代白寿にして多辯

笛をちよと腰にななめに里祭

PDF= 俳誌 @ salon

童ん女も撥を捌くや里祭

去ぬ燕雨に並びて声の無し

ひと籠の摘み菜茹でてこんなもん

硬直の始まつてゐる鵙の贄

山の萩風に瀬音に散り急ぐ

雨水に押されふくるる萩の塵

コスモスを支離滅裂の茎支ふ

PDF= 俳誌 @ salon

竹間集

同人作品

零余子落つ

橋添やよひ

遮那王の駆けし山径ちちろ鳴く
大前の身に精霊の秋季かな
零余子落つ音や天狗の仮眠刻
権現を祀る鞍馬の秋澄めり
唐辛子吊つて蕪村の母の里
大王の埴輪色なき風の中
老いに勝つ咀嚼三十寒露かな

燕帰る

浅田　光代

石庭の見えざる石や白露の日
待宵のすこし汚れて猫戻る
いつしんに良夜を駆くるハムスター
こんじきの西日を絞り蛇穴に
校正は素読み段階夜食の灯
あぶれ蚊にくはるる虚子の句碑の前
燕帰る朝焼けに胸突きだして

続き絵

柿沼盟子

黒雲の上の照りをる野分前
黒板に日の反射する野分晴れ
花野へと花野を越えてリフト継ぐ
四五本の木樹を呑み込み葛の花
続き絵の囲ふ作事場小鳥来る
みなこちら向きて倒るる曼珠沙華
ビストロに祭提灯秋高し

PDF= 俳誌 @ salon

秋立てり

高村　令子

小刻みに秋のきてゐる机かな
砂利踏んで友と新涼頒ちけり
言霊も木霊も秋の気配かな
街路樹の影のうつろひ秋立てり
目に力溜めて月の出迎へけり
名月や大和国原海に浮く
畦なりに紅の帯び解く曼珠沙華

小鳥来る

土井　三乙

西瓜ふたつ大きな方を子に持たす
墓石の裏に我が名や洗ひたる
灯籠を灯して老のやすけしよ
静かに確と沼の面を吹く秋の風
水音の方より来る秋の蝶
小鳥来る旧家に大きおんこの木
銀河澄む北上山系くろぐろと

風の盆

林　いづみ

オホーツクの崖に果てたる大花野
山肌の雲の奔りや野分立つ
青鬼郷の兜造りや蓼の花
水澄むや齢を重ぬ山毛欅林
夜流しの胡弓と一と夜風の盆
束稲山と大河をへだつ群稲棒
露しとど野沢菜丈の短かかり

鳥渡る

小林　共代

鳥渡る水の匂へる散居村
台風の眼の中にあり力石
二百十日海堡白く乾きをり
鷹柱崩るる音の伊良湖岬
黒富士をはるかに釣瓶落しかな
夕野分庭の片方の小鳥塚
夜長かな読み継ぐ遠野物語

PDF= 俳誌 @ salon

竹間集作家特別作品

ふるさと

工藤ミネ子

曲屋の紫陽花は地に触るるほど

涙雨ためて零して七変化

青山河ふと「ふるさと」を口遊む

湯の宿や少し錆びたる栗の花

戸が開いて涼しく友の訪なへり

真澄路をたどる炎暑に影ゆだね

島のごと村を入江に大青田

捩花のひとむら風のこどもかな

PDF= 俳誌 @ salon

草丈は風のシーソー赤とんぼ

新涼のポプラが散らす光かな

大樹なすもみずる槻のうねりかな

穴惑ひ夫にしつぽを見つけらる

秋蝶や風のはやさに押されつつ

秋蟬の一途の声を仰ぎけり

終活の箪笥も塵に小鳥来る

風足に遅速のあそび秋桜

母の手の届く所へ掛け大根

濁声の筋を通して雨蛙

帰り咲く一花に探す花瓶かな

畑にあるごと亡き父母へ菊の花

PDF= 俳誌 @ salon

山河集

同人作品

南うみを選

秋風や子規のをらざる子規の家　内藤　静

笹鳴つて子規の墓前や秋澄める

橋脚の踏ん張つてゐる野分かな

厚木基地

軍用機ひと飛びに行く大花野

木瓜の実の拙なるままに色づきぬ

掃ききれぬほど神木の銀杏散る　伊藤　紫水

神棚の幣束の揺れ台風圏

被災地の道は一本冷さまじや

烏瓜揺らす北風小僧かな

山荘の前も後ろも蔦紅葉

がやがやと萩擦つて来る万歩会　池田　光子

人去りて風とりもどす寺の萩

引つ越しの荷物の隅に夜食かな

輪踊りの影のかさなる辻あかり

おわら盆唄出だしのこゑの甲高き

秋の日の海へ出てゆくモノレール　橋本　之宏

高層のビル壁面に残暑かな

秋の蚊をためらひつつも打ちにけり

新涼の改札口に挨拶す

日を浴びてなほ色増してきし赤のまま

老いを語る八十路の陛下秋暑し　竪山　道助

釣瓶落とし昔公候伯子男

稲架襖帰郷の我をたぢろがす

東京が素顔をさらす野分跡

小鳥来る廃館近き領事館

PDF= 俳誌 @ salon

◇特別作品◇

海岸線

島　玲子

カンナ咲く浜に一日のテント張る

風も漸秋日の浜に帆の用意

海原に転ぶ帆のあり秋うらら

えのこ草海人小屋の昼戸を閉てて

海原の白帆を指して秋の蝶

バス停へ上がる家並みや海桐の実

色変えぬ松や社殿は磐に立つ

子産石のお礼参りや初紅葉

PDF＝俳誌の salon

葛かずらの大崩過ぐ海岸線

荒磯波黒髪を吹く野分かな

立石の赤き岩肌秋の潮

立石を洗ふ日月新松子

秋澄むや入り江の幾つ岬幾つ

野分晴海に立ちたる富士天城

半島へ雲の幾重やユッカ咲く

翻り海より岬へ小鳥どち

朝毎の浜の体操鳥渡る

海上の最も白き冬鷗

引く波の小石を鳴らす秋思かな

ふるさとの海辺を出でず雁渡し

PDF=俳誌の salon

風土独語／南　うみを

橋脚の踏ん張つてゐる野分かな　　内藤　静

季語の「野分」に対して素材は「橋脚」ひとつ、それを「踏ん張つて」で繋ぐ単純化の典型の句です。読み手は「踏ん張つて」から強風と濁流を必死に受け止めている「橋御」を想像できます。素材を切り詰めることが読み手の想像力を喚起するのです。

被災地の道は一本冷さまじや　　伊藤　紫水

この句の「道は一本」が、まだ復興の進まない瓦礫の中の一本道を想像させます。また「冷さまじ」は荒涼とした世界を増幅しています。「道は一本」は被災を受け止めた者のことばです。

野分して『剃刀日記』の世の遠し　　赤石　梨花

『剃刀日記』は桂郎師が昭和十七年に作家デビューした記念の小説です。その桂郎師の波乱万丈の「世の遠し」となりました。「野分して」も桂郎師の境涯と重なります。

まだ誰も来ぬ子規庵の秋簾　　奥田　茶々

「子規庵」に一番乗りしたのでしょうか。「まだ誰も来ぬ」静かな庵に「秋簾」が掛っています。子規の忌日は九月十九日。「秋簾」を見る作者にふと、死の間際の子規の眼が過ぎりました。

がやがやと萩擦つて来る万歩会　　池田　光子

「がやがや」で賑やかな集団を、「萩擦つて来る」で萩の盛りの小路を想像し、「万歩会」で元気な熟年の人たちであることが解ります。表現世界に動きがあることで臨場感が出て、萩の庭を賑やかにしています。

刈り株のまだ新しく稲架襖　　石井　秀一

この句のポイントは「まだ新しく」です。刈り取られてすぐに稲が高々と掛けられ、黄金色の襖をなしているのです。「刈り株」の新しさを発見したところが手柄です。

秋の日の海へ出てゆくモノレール　　橋本　之宏

この句、「海へ出てゆくモノレール」がまるで遊園地の宙をゆく乗り物を想像させ、楽しい気分になります。空の青と海の青の世界を空中散歩です。「電車」ではこういかないでしょう。

スケッチの人も花野の景とせむ　　落合　絹代

この句、「花野」そのものを詠むのではなく、「花野」をスケッチする人を描くことで、「花野」という季語の表情を新たにしました。作者は季語のいろいろな表情のひとつを摑まえました。

〈以下略〉

PDF= 俳誌 @ salon